

巻頭言

学会活動の現状と展望

井上 光弘¹

土壌物理学学会の事務局は、平成 21 年 4 月から九州地区（筑紫二郎前会長，九州大学）から中国地区（井上光弘会長，鳥取大学）に移り，加藤英孝（副会長，農業環境技術研究所），木原康孝（庶務幹事，島根大学），猪迫耕二（会長付庶務幹事，鳥取大学），森 也寸志（会計幹事：島根大学）で，平成 23 年 3 月までの任期 2 年間を運営します．編集委員会は，諸泉利嗣（編集委員長，岡山大学）のもと専門性と地域性を考慮して全国から 13 名の編集委員で構成され，印刷所の関連から関東地区の藤巻晴行（筑波大学）が編集幹事を担当することになりました．また，本学会大会を農業農村工学会土壌物理研究部会の前日に開催する慣例で，同部会長の登尾浩助（明治大学），そして，前事務局から筑紫二郎（前会長：九州大学），長裕幸（前庶務幹事：佐賀大学）に会長推薦の評議員になってもらいました．幹事と役員が一体となって，学会の運営と発展のために尽力されることを期待しています．

学会誌の「土壌の物理性」の第 1 号は 1959 年に発行され，2009 年は 50 周年になります．1999 年に土壌物理研究会から土壌物理学学会に名称変更になってから 10 年が経過し，2009 年は記念すべき年です．筑紫二郎前会長のもとで，学会誌「土壌の物理性」の印刷関連の経費を軽減するために，Tex 化による版下作成と，本誌を従来 of B5 版から A4 版へと変更することが総会で決定され，新たに表紙に写真を掲載した A4 版の学会誌「土壌の物理性」111 号が 2009 年 3 月に刊行されました．学会誌そのものは永遠に残るもので，学会誌の表紙や大きさなどの形態が大きく変わり，印刷の質が向上したことは記念すべきことで，今後，中身を見やすく改良を加える所存です．

新事務局では，当初 50 周年を意識して，恒例のシンポジウムの題目を「土壌物理研究 50 年と今後の研究展望」として「土壌の物理性」のレビューを検討しましたが，過去 50 年を振り返ることよりも，周辺の学会とのコミュニケーションを強化し，明日に向けて土壌物理学の研究がさらに発展する課題に着目することにしました．その理由として，土壌物理学学会では，新しい情報を的確に発信するためにホームページを常に更新していること，ホームページに第 1 号（1959 年）から第 100 号（2005 年）までの学会誌の内容について pdf 形式のファイルを無料で公開していること，この間の「土壌の物理性」の論文リストについて論文題目別と著者名別に必要な情報を検索できること，第 101 号以降の学会誌の表紙の情報（目次）をホームページ（<http://www.soc.nii.ac.jp/jssp3/>）に公開していること，つまり，興味のある方は検索システムを利用して過去の研究内容を把握できるからです．それでは，どのようなシンポジウムの題目が多くの会員に興味があるのでしょうか？

近年，地球温暖化などグローバルな問題が，国内外を問わず注目されています．本学会も「日本地球惑星科学連合（JPGU）」の団体会員になり，2009 年 5 月 16 日から 5 月 21 日に Japan Geoscience Union Meeting 2009 が幕張メッセ国際会議場で開催され，総会に学会の幹事が出席（詳細は本誌に掲載）し，学会員も研究発表と情報交換に参加しました．このような背景もあり，平成 21 年 10 月 24 日に明治大学で開催されるシンポジウムの題目は，「地球表層プロセスにおける土壌物理学の役割」で企画しています．つまり，表層付近の土壌物理現象を他の研究分野も取り込んで議論を深めようというものです．東京近辺で開催するメリットも考えています．日本は北海道から沖縄まで南北に長細いので，ほぼ中央に位置する東京はどの地方からも交通の便が良いことで多くの参加者が期待されます．そこで，2009 年度土壌物理学学会大会（第 51 回シンポジウムとポスターセッション）では学会員の相互の情報交換を深めたいと思います．ちなみに，学会の正会員数の動向に注目すると，2001 年 9 月に 450 名，2005 年 6 月に 386 名，2009 年 2 月に 362 名と若干減少傾向にあります．しかしながら，シンポジウムの参加者は，100 名程度で若い研究者のポスター発表が盛会であることは明るいニュースです．最近はどこでも若手研究者の育成が真剣に議論されています．やりがいのある仕事，興味のある研究テーマが求められ，夢のある研究生活の環境づくりが重要であると考えています．学会の発展のためには若いマンパワーが必要で，多くの投稿を期待しています．

学会誌は年に 3 回刊行される定期刊行物です．会員の皆さんが読んで役に立つと思える刊行物にすることが肝要です．一般の読み物であれば楽しかったとか，感動したという回答があるでしょう．しかし，学術刊行物である「土壌の物理性」には，ある程度の学術レベルと，学会員の情報交換の場が必要です．例えば，米国土壌科学学会 2009 年次大会（SSSA, 2009 International Annual Meetings）の研究発表の情報があれば，世界の土壌物理の研究動向が把握できます．もちろん，最近インターネットで見れば関連した国際学会がどこであるかは明確です．しかし，大学や

¹ 鳥取大学乾燥地研究センター

研究機関などの独立法人化後、ますます忙しくなった日常生活の中で、どこまで情報を集めることができるでしょうか？長谷川周一元会長時代から開始された講座：古典を読む（第 101 号から）や特集：水分・溶質モデル（第 104 号から）などは、読者に役に立つシリーズとして定着し、大学院の講義資料としても使用されています。学会誌には、論文のほかに、現在の研究紹介、土粒子、資料などの投稿区分があり、速報性のある「技術研究レター」や「Q & A コーナー」など、土壌物理学と関連した情報サービスを強化することが、学会誌の充実になります。具体的には、地盤工学や環境工学の技術者などにも興味がある土壌環境問題について、シリーズ特集を考えるなどのさらなる工夫が必要と思います。

タイトルに「学会活動の現状と展望」と題していますが、内容は「土壌物理学への思い」になるでしょうか。最近の世の中の動きが速く、学会の運営についても、的確に状況判断をして対処しないと取り残されていく可能性があります。学会活動としては、従来のように総会を含めた学会の年次大会です。シンポジウムやポスターセッションで、多くの興味がある方々の熱いディスカッションがあります。その中から新しいアイデアが生まれる場合や、情報交換によって今後の研究展望が開ける場合が多いからです。その次に大きな学会活動は、学会誌の発行です。学会大会に参加できなかった方も学会誌を読むことで、シンポジウムやポスターセッションのホットな話題に触れることができます。そして、前述したように会員の方が何か学会誌の中に残る記事があることが大切であると考えています。学会を支えているのは人です。会員数が減少すれば学会活動も低下するので、会員数を増やすためには魅力ある学会にすることが肝要で、そのひとつがホームページの充実です。そして、会員の皆さんが、アカデミックで暖かい学会であると認識されるような学会にしたいと考えています。昔から新しいアイデアは若いときに、ふと湧き出ると言います。つまり、ポスターセッションに集う若い研究者たちの活躍の場が、学会活動の中に存在することが重要です。良いアイデアの評価は、学会の優秀ポスター賞の受賞であったり、学会に参加した科学研究補助金のようなプロジェクト審査員の耳に入ったりして、結果的に研究内容が認められていく場合もあります。何度も強調していますが、学会は人です。それぞれの学会に対する愛情が今後の学会の発展に不可欠です。研究の世界は絶え間ないチャレンジ精神と柔軟な思考力と体力が必要です。創造性豊かな科学技術の発展のためには基礎的知識と情報交換が必要で、学会が萌芽研究などの出発点になることを願っています。